

『奔馬』論

——「神風連史話」を中心に——

一 英雄への夢

『奔馬』は、三島の遺作というレッテルが貼られた四部作『豊饒の海』において最も作者の政治思想に接近した作品である。『憂国』・『喜びの琴』・『朱雀家の滅亡』・『蘭陵王』などと同じく、『奔馬』にも作者の右翼的心情が作品の根底に流れている。しかし晩年の三島は意図的に作品の思想化を避けたきらいがあり、従って、現実における発言や行動と作品とをそのまま結び付けて論ずる場合、何かズレのようなものを感じざるを得ない。果たして三島の作品は晩年の政治思想とどれほど関わっているのか、特に、『奔馬』の中核を成している「神風連」の精神が作者の現実をどれほど代弁しているのか、現実における三島の思想的な変遷を辿りながらこの点を考えて見ることにする。

昭和三十八年、三島はエッセイ「私の遍歴時代」に「廿七歳から卅七歳までの十年間には、これと云った起伏がない」と書いた。従って、もし三島に大きな転機が訪れたとしたら、それ

許

昊

は昭和三十八年以降になる。三島の評論及びエッセイを閲覧して見ると、政治思想に関連する発言が活発になるのは「林房雄論」（昭38・2「新潮」）を書いたあたりからである。既に橋川文三氏から「三島は『林房雄論』によって、ほとんど初めて歴史との対決という姿勢を示した」という指摘があるが、「林房雄論」が後に新潮社から上梓された際の「跋」（昭38・8）には「林房雄論を書きとなった動機は、一つには林氏に対する世間の偏見への義憤であるが、一つには林氏の問題性をめぐってあれこれと考えてきた自分の青春の整理のためでもあった」という告白が見られる。

昭和四十年七月、「文芸春秋」に寄せた「私の信条」に三島は「いつの時代にも、文学そのものが、現実世界を動かす、それほどの危険な力を具えているとまじめに考えられたことはない。そこで文学者は、英雄たらんがためには、思想か信仰を持たねばならない」と書いている。三島が「英雄たらん」ことを夢見た話は早くも「小説家の休暇」（昭30・11）に見られ、「大体において、私は少年時代に夢みたことをみんなやってしまっ

た。(中略)唯一つ、英雄たらんと夢みたことを除いて」と記されている。但し当時の英雄への夢は『午後の曳航』(昭38・9)が象徴する如く、政治思想とはかけ離れた孤独なロマンティストの夢に過ぎなかった。しかし「私の信条」における「英雄」への夢は現実への参加意欲をかなり強く打ち出している。更に「年頭の迷い」(昭42・1・1)においても『豊饒の海』に触れながら、「依然、私にとって魅力的な栄光は、英雄の栄光であって、文豪の栄光ではない」と、文学よりも現実における「英雄の栄光」を求めている。

「私の戦争と戦後体験」(昭40・8)の中で三島が戦時中のことを回顧しながら、「生活と芸術とをどうしても二元的に考えたがる私の傾向は、その当時に形成された」と語ったのは、文学とは別の次元で現実を考えるようになった遠因として受けとめられる。

昭和四十二年四月十二日から五月二十七日まで単身で自衛隊に体験入隊した時、三島は「本名の『平岡』の名で入隊」(『滝ヶ原分とん地は第二の我が家』、昭45・9・25)したという。これは作家という立場を離れた現実行為である。この期間中に「神風連史話」が「新潮」に連載されたが、膨大な資料を要する「神風連史話」が訓練中に書けた筈はなく、多分出来上がったのは入隊前であろう。

二 「神風連史話」

『奔馬』は昭和四十二年二月から翌年八月まで休みなく十九回に亘って「新潮」に連載された。そのうち第九章の「神風連

史話」は同四十二年五月号に全文が一挙掲載された。神風連に関する取材のため三島が京都や熊本を訪れたのは同四十一年八月の下旬である。熊本への取材旅行については当時三島の訪問を受けた荒木精之氏が「三島由紀夫氏の神風連調査の旅」(『回想の三島由紀夫』所収、昭46・11、行政通信社)を書いて詳しく伝えている。荒木氏によれば、「三島氏は自分が神風連にひかれるに至った動機について、インドのガンジーの糸ぐるまに象徴される抵抗の精神が日本には何かあるかと考えられるうち、神風連に思いついた」という。熊本へ行く前に既に三島は木村邦舟の『血史』²⁾・小早川秀雄の『血史熊本敬神党』³⁾・石原醜男の『神風連血涙史』⁴⁾など、神風連関係資料のうち大事なものは殆ど読んでいた。更に当地では『桜園先生遺稿』及び荒木氏の著書『神風連烈士遺文集』などを入手したという。⁵⁾

三島が神風連について触れたのは『対話・日本人論』(昭41・10、番町書房)がその最初で、取材旅行直前の発言が数カ所見られる。ここで三島は対話相手の林房雄氏に「これは実際行動にあらわれた一つの芸術理念でね、もし芸術理念が実際行動にあらわれれば、ここまでいくのがほんとうで、ここまでいかないのは、全部現実政治の問題だと思えますよ」、「僕は、日本精神というもののいちばん原質的な、ある意味でいちばんフアナティックな純粹実験はここだったと思うのです。もう二度とこういう純粹実験はできませんよ」と語っている。そうして、取材旅行の後も数回、神風連に触れており、「年頭の迷い」(前掲)では「この間熊本へ行って神風連を調べて感動したこと、一見青年の暴挙と見られがちなあの乱の指導者の一人で、

壮烈な最期を遂げた加屋齋堅が、私と同年で死んだという発見であった」と、やや角度を変えた感想を述べている。「道義的革命」の論理（昭和42・3）にも「二・二六事件の思想的源流は、明治維新にはなく、神風連に求めるほうが論理的である」という短いコメントがあり、影山正治著『日本民族派の運動』の付録として書かれた「一貫不惑」（昭44・5）には「私は必要あって数年前から、神風連の研究をはじめ、影山氏がその思想的源泉とするこの事件が、西欧に対する日本の最後の果敢な抵抗として、文明的意義を有することを知った」という記述が見られる。

『奔馬』に出て来る「神風連史話」は「山尾綱紀著」となっているが、多分綿密な調査と豊富な資料に基づいて三島が作成したのであろう。この点について林房雄氏は「山尾氏の著書存在には荒木君も言及して、特にその文章が『三島好みの壮麗』である点から推して、実存の古書にしても、半ば以上は三島君の創作かと思われる」（『悲しみの琴』、昭47・3、文芸春秋社）と推定している。林氏は「三島由紀夫氏の神風連調査の旅」（前掲）を引用しながら「荒木君も言及して」と言ったが、荒木氏は『奔馬』と神風連（『日本及び日本人』、昭46夏号所収）で、「大神宮の拜殿」の描写に触れながら、「それはほとんどその通りであり、そしてそれはいかなる書物にも載ったことはなく、じかに見たものでなければ書けぬ文章である」と、「神風連史話」が三島によって書かれたことを示唆している。更に荒木氏は「近代への叛逆者達」（『浪漫』昭49・11号所収）においても「太田黒伴雄が宇気比をする場面は、むろん三

島氏のつくり出した場面である」と断定している。この宇気比の場面について渡辺京二氏は、「三島由紀夫は『奔馬』のなかで、太田黒が宇気比する様を見て来たように描写しているが、彼が宇気比の具体的な方法について誰から教示を受けたのかは私は知らない。それは秘儀であるから、敬神党関係のいかなる文献にも記載されてはいない。あるいはこの秘儀は今でも敬神党関係者の一部に云い伝えとして伝承されていて、三島はそれを聞くことを得たのだろうか」（『神風連とその時代』、昭52・8、葦書房）と推測している。

宇気比のことは熊本を訪れる前に既にかんりの調べがついていたらしく、三島は『対話・日本人論』で神風連に触れながら次のように説いている。

「うけひ」というのを神代から伝わった神儀のなかでいちばん大切にされていて、中古以来、ちょっとこの道を伝えた人が絶えていたのだけれども、それはなんとかして復活しようとして、それで結局この「うけひ」の道が、溺れる人間を救うのと同じことであって、これしかない濡れた人間を救う方法はないのだと。それでその根本思想というのは、やはり実際の神に仕えるものも、現世の神である天皇に仕えるのも、幽顕の違いこそあれ、その理において異なるところはないという考えですね。

更に熊本を訪れた際は「神風連の宇気比についてはかねてから一言言をもっていた」（前掲）三島由紀夫氏の神風連調査の

旅」といふ森本忠の助言を得ている。それに『桜園先生遺稿』が三島の「蔵書目録」にはないが、三島がそれを二日間て読みあげたという荒木氏の証言もあり、従って、そのなかの「宇氣比考」も参考にした筈である。熊本へ行く前に寄った京都の大神社で三島がどれほど宇氣比に関する知識を得たのか分らないが、荒木氏の証言によれば既にかんりの程度まで知っていたらしい。また、大東塾の創設者影山正治氏の著書などを通しても神風連関係の情報を得た可能性はあるが、その辺の事情は影山氏が多くのものを語らず自決したために未だ明らかでない。いずれにせよ、「神風連史話」の作成にあたって、三島は宇氣比に関する豊富な資料を用いており、或る程度の脚色は可能だったのではないかと思われる。

この他にも、「神風連史話」の後半に見られる逸話が渡辺氏の「神風連伝説」(前掲『神風連とその時代』所収)と多く重なっているのは両者共に小早川秀雄の『血史熊本敬神党』から拾材したせいであろう。但し、書いたのは三島が先で、渡辺氏は「神風連伝説」を書いた理由を「谷川健一氏のすすめによる」と断っているが、執筆が昭和四十二年だということから、多分直接のきっかけは三島の「神風連史話」に触発されたものと思われる。

「神風連史話」はそれ自体が独立した立派な著作になり得ている。「敗北の朝、風景はこの上もなく美しい。けがれがなく、澄みやかで、静穏である」云々というところなど、林房雄氏が指摘している通り、三島の創意を窺わせる描写が随所に見られるが、史実からさほど離れていない。しかし、「神風連史話」

及び「昭和神風連」と三島事件とを直接つないで論ずるには幾つかの検討すべき問題点が残されている。三島が明治の神風連に強く心を打たれたとしても、それをそのまま現実における政治的行動に持ち込むほど無謀であったとは思えず、三島自身も「二度とこういふ純粹実験はできない」と知っていたのである。

三 蓮田善明と神風連

三島は昭和十六年十一月、「文芸文化」第四十一号に「花ざかりの森」「その三(上)」を載せて以来、終巻の第七十号まで殆ど毎回投稿している。日本浪漫派の系統を引く「文芸文化」が無名の文学青年を一人前の作家として認めてくれたのはもちろん三島には感無量だった筈である。特に三島にとつて忘れられないのは第五十三号(昭17・11)であろう。その前号に載せた詩「かの花野の露けき」が編集ミスで一部欠落したため、第五十三号の巻末に全文再収録されたのである。しかもここには、当時としてはかなり長い分量の『みのもの月』も一挙に掲載され、全四十三頁しかない薄い冊子のうち十八頁を三島の作品が占めている。そればかりではなく、同号には蓮田の「神風連のころ」が載っていた。蓮田は三島の「花ざかりの森」を推称した人でもあり、「文芸文化」の創刊者として「発行兼編輯人」を勤めるかたわら、毎回同誌に作品を発表している。従って当時、三島が「神風連のころ」に一応目を通した可能性は十分ある。

蓮田は神風連発祥の地、熊本出身である。「神風連のころ」は森本忠著『神風連のころ』の書評として書かれたもので、

この中で蓮田は石原醜男¹³から神風連の講授を受けたことなどを述べながら、神風連の乱を政治運動から切り離し、「神風連は唯だたましいの事だけを純粹に、非常に熱心に思いつづけたのである。日本人が信じ、大事にし守り伝えなければならぬものだけを、この上なく考え詰めたのである」と評している。これは三島が荒木氏に送った礼状における「神風連の遺風を慕って訪れた熊本¹⁴の地は、小生の心の故郷になりました。日本及び日本人が、まだ生きている土地として感じられました」という件りとかなり類似している。

不二教職員連絡会から出された『殉国の教育者』（昭46・3、日本教文社）所収の「蓮田善明と神風連」（共同制作）には「蓮田善明と神風連とは切っても切られぬ関係にあり、三島由紀夫とも切っても切られぬ関係にある」、「この事情は三島の遺著『豊饒の海』第二部『奔馬』を読めば余りにも明らかであろう。全篇を貫くのは『神風連』であり、主人公飯沼の割腹はまた、作者三島の割腹そのものである」と、三島・蓮田・神風連の三者の密接な繋がりが指摘されている。

この他にも「文芸文化」時代を中心に、岡保生氏の「三島由紀夫と蓮田善明」（『浪曼』、昭47・12号所収）、大久保典夫氏の「保田与重郎、蓮田善明、三島由紀夫」（『回想の三島由紀夫』所収、昭46・11、行政通信社）、小川和佑氏の「三島由紀夫少年詩」（昭48・9、潮出版社）、栗山理一・池田勉・塚本康彦氏の「鼎談・蓮田善明」（『浪曼』、昭50・1号所収）、松本徹氏の「古今和歌集の絆」（『三島由紀夫・美とエロスの論理』所収、平3・5、有精堂）など、三島の文学形成における蓮田の影響の

大きさを論じた研究がある。やや独自の論を展開したのは荒木氏で、文学の面では三島が「文芸文化」時代に蓮田の影響を受けたことを認めながらも、その後は「蓮田的なものをしのばせるものはあまり見られなかった」といい、「蓮田の精神が判ってきたのは」二・二六事件三部作を書いたあたりだと推定した（前掲「近代への叛逆者達」）。荒木氏の「三島由紀夫の神風連調査の旅」（前掲）によれば、三島が熊本を訪れた際、蓮田未亡人を招いて思い出話を交わしたという。三島が蓮田の自決からはさほど影響されることがなかったという荒木氏の見解は多分この時の対話から感じ取った印象によるものであろう。

三島が「文芸文化」時代に蓮田に関連して書いたものと言え、管見の限り、自決した蓮田への追悼詩が二篇¹⁵あるだけである。それから十数年後、昭和三十八年に書いた「私の遍歴時代」では「文芸文化」に触れながら、「同人のうち、蓮田氏は最右翼で」、「蓮田の死については、小高根二郎氏発行の雑誌「果樹園」に連載された「蓮田善明とその死」¹⁶に詳しい」と簡略にコメントしている。三島の目に「最右翼」として映った蓮田が、長い間その関心の外にあったことは確かである。それから再び数年間、三島は蓮田のことについて何も触れていない。

「三島由紀夫短編全集1」の「あとがき」（昭40・3）にも、「恩師清水文雄先生の同人雑誌『文芸文化』とあるだけで、蓮田のことは何も記されていない。但し、小高根氏宛に送った手紙三通が「三島由紀雄全集」第三十四巻に収録されているが、その最初の、昭和三十四年八月七日付の手紙は、「蓮田全明氏の自決に関する御一文を読み、感佩に堪えず、一筆御礼を申し述

べたくなりました。しかし小生としては、氏の思想がかかる行動に直結したことは、さして謎とは思えませぬ。それより、直結しなかったら、そのほうがふしぎだと思えます」と、蓮田の自決についての自分の意見を短く述べた後、話を変えて伊東静雄の「稲妻」を絶賛したものである。ここにもやはり三島が蓮田に傾倒していたような痕跡は見られない。それに比べると、三つ目の、昭和四十三年十一月八日付の手紙では、「蓮田善明とその死」感激と興奮を以て読みました。毎月、これを拝読するたびに魂を振起されるような気がいたしました。この御作品のおかげで、戦後二十数年を隔てて、蓮田氏と小生との縁が確かめられ固められた気がいたしました。「蓮田氏と同年にいたり、なおべんべんと生きてるのが恥かしくなりました」と、九年前の手紙に比べたら対蓮田観に大きな変化を見ている。

「文芸文化」の基本路線は池田勉が創刊号（昭13・7）に寄せた「伝統の権威地に堕ちて、古典を顕彰するの醇風も亦地を払って空しい。日本精神の声高く宣伝せらるるあれど、時に現実粉飾の政論にすぎず。芸文の古典は可惜、功利一片の具と化して」云々という「創刊の辞」がそのまま象徴している如く、国学の伝統を濃厚に受け継いでいる。しかし当時の三島に最も影響を与えたのは堀辰雄である。「文芸文化」に発表した二度目の小説『みのもの月』も「日本古典、および堀辰雄によるその現代語訳」（「自己改造の試み」、昭31・8）と自ら評している。一方では鏡花ばりの作品も書き、谷崎を読み、太宰治に憧れていた当時の三島に、「文芸文化」の精神または蓮田善明の影響

がどれほど滲透したか、甚だ疑問である。文学ばかりでなく、蓮田の死も三島にとつては「最右翼」として、敗戦という騒ぎの中で他人事としか映らなかつたのである。

ところが、三島は蓮田の死後二十数年も経った昭和四十三年になって年頭から「文芸文化」時代に関連して蓮田の思い出を幾片も語っている。「日本の古典と私」（昭43・1）では「文芸文化」時代に触れながら「私の少年期と戦争とは重なっているから、当時の日本主義が幾分私の国文学熱を高めたことは争えない」と告白している。また「『文芸文化』のころ」（昭43・1）においても「文芸文化」の同人たちのことを「清水氏の純粹、蓮田善明氏の烈火の如き談論風発ぶり、池田勉氏の温和、栗山理一氏の大人のシニズムが、それぞれ、相映じて、たのしい一団を形成していた」と回顧し、引き続き、

ほとんど政治的な話は出なかつたように思う。国文学のこともあえかな（こんな言葉も当時流行していた）、もつとも優美な魂が、ここでは何よりも大切にされている、という印象を私は強く抱いた。外側から見て戦闘的に見えるかもしれない集団が、内部にやさしさを充満させている例は多々あることで、私はそのやさしさだけに触れて育つたのである。

と語っている。この文中には蓮田善明の次のような言葉が引用されている。

「いよいよ皇国思想について熱烈の論が燃え立っている。しかししたゞ思想としての漢意排斥及び日本論は、なお未だ漢意と目される。文学としてのやまとごころの大事さに思ひ至る時が真の皇国古意の開蕾である。私どもの用意しているのは、世上の思想論ではなく、その文学のためである」(昭和十八年五月号・第六巻号後記―蓮田善明)

これについて三島は「後年はけししい右翼イデオログの汚名を着た蓮田善明氏の、多少せっかちな、一本気な、しかし志すところの明白な『優美な』発言である」と評したが、五年前までは三島自身が蓮田のことを「最右翼」と称したのを考えると、その間に三島の立場に大きな変化があったことが察せられる。

更に、「『花ざかりの森』のころ」(昭43・1)では、出征のため『花ざかりの森』の出版記念会(昭19・11・11)に参加出来なかった蓮田善明のことについて触れている。

このような、蓮田に対する三島の心境の変化は『豊饒の海』制作と少からぬ関連を持つ。

四 「二元論」

ここで一つ、寺田透氏の「豊饒の海」論について触れて見ている。寺田氏は『奔馬』について「奇妙なところ」を三つ指摘している。まず「『神風連史話』なるものが、規模こそちがえ、三島たちの昭和四十五年十一月二十五日の行動の完全な予告なことであることには、どういふ意味があるのだろうか」と「第一」の疑問を提出し、更に「勲の父」である飯沼茂之に関する

人物設定に一貫性がないことと、悪役の筈の蔵原武介が「作者によって一度も悪くは書かれていない」ばかりでなく、むしろ堀中尉や洞院宮が裏切り者の役を持たされたことを「第二」「第三」として挙げ、「作者の右翼的情熱の熱度はわれわれ読者を不安にするほど高く」云々という結論に達している。寺田氏は「第一」において「三島事件」を「神風連史話」と同一レベルから見ている。しかし三島は「暁の寺」を脱稿した時点で『豊饒の海』に関連して次のように語っている。

かくて、この長い小説を書いている間の私の人生は、二種の現実を包摂していることになる。(中略)作家はしばしばこの二種の現実を混同するものである。しかし決して混同しないことが、私にとっては重要な方法論、人生と芸術に関するもつとも本質的な方法論であった。(小説とは何か、昭43・5―45・11)(傍線引用者)

この言葉は、換言すれば、三島自身、意識的に『豊饒の海』を現実から切り離して、純粹な創作として書いたという意味に取れる。

もう一つ、三島の言葉を引用しよう。

私は、私の「楯の会」の運動と、私の文学の質との間に、たえず均衡が保たねばならぬことを知っている。もし均衡が破れたら、「楯の会」が芸術家の道楽に墮するか、それとも私が政治家になってしまっか、どちらかだ。言葉

の微妙な機能を知れば知るほど、私は芸術家というものが、現実に対して、猫のように絶対に無責任であることを知るにいたった。「楯の会」のこと、昭44・11（傍線引用者）

これを『豊饒の海』と結び付けて解釈するならば、作中の神風連が「楯の会」とは別次元のものとして、純粹なフィクションの領域内で取り扱われたことを意味するであろう。

ここに、三島における蓮田の影響が問題になる。小高根二郎著『蓮田善明とその死』の「序」（昭45・3）に三島は次のように書いている。

蓮田氏の文業とその壮烈な最後との間には、目のくらむような断絶があり、コントラストがある。終戦直後、蓮田中尉がその聯隊長を通敵行為の故を以て射殺し、ただちに自決したという劇的な最後を遂げたとき、これを伝え聞いた蓮田氏の敵は戦時中の右翼イデオログのフアナティシズムの当時の帰結だと思つたにちがいない。しかし少年時代氏に親炙した私にとって、この死と私の知る蓮田氏のイメージとの間には、軽々に結び合わされぬ断絶があつた。

（傍線引用者）

「序」自体が、蓮田を論じたものというよりは、遅ればせながら蓮田を理解するようになった三島自身の立場を語つたものである。三島はピストルで自決した蓮田の最期には冷淡であつ

た。円谷幸吉への追悼文「円谷二尉の自刃」に「彼は職業柄いくらでも手に入る拳銃を避け、又、女々しい毒薬を避けて、剃刀で花々しく血潮を散らして死んだ」と書いたのも昭和四十三年一月である。既述のとおり、同じ時期に三島は蓮田善明の思ひ出を幾つも語っている。三島が蓮田に共感したのは、その文学でもなければ、その死でもない。文学とは別の次元で「目のくらむような断絶」として「最右翼」を実践した蓮田に漸く気づいたのである。その時、昔の、蓮田の「神風連のころ」を想起したならば、長い間ほとんど関心の外にあつた蓮田が、一挙に三島の心を捉えたことは想像に難くない。

山本舜勝氏によれば、昭和四十五年四月、三島は「蓮田善明とその死」を持参して訪れて、本を手渡しながら「私の今日は、この本によって決まりました」（『憂悶の祖国防衛賦』、昭55・6、日本文芸社）と言つたそうである。三島は現実を文学から切り離した時点で、自分が蓮田と同じ立場にあるのに気づいたのである。その、気づいたことが、更に三島の二元論に拍車をかけるようになる。それが如何なる形で三島の作品に影響したかは、『暁の寺』及び『天人五衰』と、「楯の会」における憲法研究の草案として書かれた「問題提起（日本国憲法）」との段差を見ても一目瞭然である。

阿部勉氏の「三島隊長の「問題提起（日本国憲法）」」（『三島由紀夫全集』第三十四巻付録、昭51・2）によれば「昭和四十五年一月初頭、第一問題提起（現行憲法批判）が出来上がり、早速市ヶ谷の私学会館会議室で、三島隊長も出席して第一回目的「憲法研究会」が持たれ」、以来、「憲法研究会」は「水曜日

毎午後六時から三時間ずつ、三島が自決するまで三十四回続いたという。昭和四十五年といえ、前年に引き続き『暁の寺』の十七回目(第三十七章)が「新潮」一月号に掲載され、四月に完結している。そして二ヶ月の休載の後、七月から『天人五衰』の連載が始まり、三島は僅か半年の間にこの最終篇を書き上げている。『暁の寺』と『天人五衰』から三島の政治思想を汲み取るとは殆ど不可能である。むしろ三島の文学的な立場は「禁色」を書いたあたりに逆もとりの感じすらある。しかし現実において三島は政治問題のど真ん中に足を踏み入れている。昭和四十三年から三島の評論にはフランスの五月革命、チェコ問題、中国の文化革命、日本の学生運動などに関する発言が頻出する。その上、教次にわたって自衛隊へ体験入隊し、「祖国防衛隊」構想を「楯の会」に切り替えている。このような三島の現実行為は既に神風連から遠のいている。一方、三島は『命売ります』という興味本位の長編小説を「プレイボーイ」(昭43・5・21—10・8)に連載した。このことを保阪正康氏は「なぜかこういう作品も書きたす」(『憂国の理論』、昭55・11、講談社)と疑問に付したが、正に三島における文学と政治の二元論の実践であった。

結論を急ぐならば、『奔馬』は、作者にとつての現実が意図的に排除された作品だということである。もしかしたら「神風連史話」を書き、その神風連の精神を「昭和神風連」という形で敷衍に実行させる過程において、文学をもって現実を代弁させることが不可能であることを三島は最終確認したのかも知れない。それが作中における、「神風連史話」と「昭和神風連」

との間に大きな溝を作った原因になったとも考えられる。三島自身は「必要あって、数年前から、神風連の研究をはじめ」たと言ったが、神風連に気がついたのは多分、橋川文三氏の「失われた怒り——神風連のことなど」⁽¹⁹⁾を読んでからであるらしい。そこから三島の文学が活気づいたのは事実だとしても、政治思想にまで変化をもたらしたとは断言できない。『奔馬』は所謂「二元論」に基づいて書かれた作品であり、従って、寺田氏が持ち出した三つの「奇妙なところ」のうち、「第二」・「第三」はフィクションの見地から解釈しない限り、いつまでも「奇妙なところ」として残るのではないかと思われる。本稿では主に、三島の晩年における政治思想と創作との関係について論じてみたが、『奔馬』を如何に文学の領域内で解釈するかという問題は別の機会に譲ることにする。

注1 初出は「天折者の禁欲」(三島由紀夫自選集)解説、昭39・7。

2 「増補日本浪曼派批判序説」(昭40・4、未來社)に再収録。

3 『定本三島由紀夫書誌』の「蔵書目録」には「木村弦雄『血史』前編」(書籍破損につき発行所不詳、熊本県、M40・8・5、重)となっている。昭和五十一年十月、大東塾出版部から神風連百年祭記念事業として『神風連・血史』(木村邦舟著、弦雄は本名)と改題復刻された。その「跋にかへて」によると「血史」の「後編」は「著者の他界によって、実際には書かれていない」という。初版は明治二十九年十二月、再版は明治四十年八月、第三版が昭和十八年に熊本市教育会によつて出された。尚、初版の出版所は明記されていない。

4 前掲「蔵書目録」に「小早川秀雄『血史』、熊本敬神党」隆文館、M43・8・15」とある。

5 前掲「蔵書目録」に「石原醜男『神風連血涙史』大日社、T10・4・13」とある。この他にも「蔵書目録」には福本日南の『清教徒神

- 風連) (大5・9、実業之日本社)、影山正治の『民族派の文学運動』(昭40・3、大東塾出版部)などが載っている。
- 5 『桜園先生遺稿』と荒木精之編『神風連烈士遺文集』は、いずれも『蔵書目録』には載っていない。前者の初版は昭和十八年六月河島書店刊、同五十六年三月青潮社から復刻される。後者は昭和十九年一月、第一出版協会刊行。
- 6 三島は『対話・日本人論』を荒木氏に寄贈する際、「旅行前に喋った部分が多いのでお目だれいと存じていますが」と手紙(昭41・10・9)に書いた。
- 7 昭和四十四年五月、光風社刊。初刊は同四十年三月、大東塾出版部刊。
- 8 蓮田善明が書評を書いた『神風連のころ』の著者。
- 9 京都に同行したドナルド・キーン氏の『悼友紀行』(昭48・7、中央公論社)によれば、三日間の滞在中、三島が一人で行動した日もあって、詳しいことはキーン氏も知らないらしい。取材旅行の事実を後に知って調べた林房雄氏も具体的なことは突き詰めていない(『悲しみの琴』、昭47・3、文芸春秋)。
- 10 猪野健治氏によれば、影山氏は生前、「三島事件」について殆ど語らなかったという(『最期の勤王志士』、「伝統と現代」昭55・1号所収)。影山氏が三島について触れたのは、「三島事件に対する所見」(『不二』昭45・12号所収)と『昭和の神風連』(『不二』昭46・2号所収)及び、この二つをまとめた『昭和の神風連』(浪曼人三島由紀夫)所収、昭48・4、浪曼社)がある。
- 11 渡辺氏が用いた資料については著書の「あとがき」に詳しい解説がある。三島が用いた資料はほとんど渡辺氏も用いている。
- 12 大隅三好氏も三島の『神風連史話』に刺戟されて小説風の『神風連——神ながらの決起——』(昭46・2、日本教文社)を著したが、字氣比に関しては桜園の「字氣比考」を簡略に紹介しているだけである。
- 13 前掲『神風連血涙史』の著者。
- 14 蓮田が自決した翌年の昭和二十一年十一月十七日、成城学園素心寮で催された追悼会に参席し捧げた「故蓮田善明への献詩」(『三島由紀夫全集』第三十五巻収録)のほか、雑誌「人間」に送られたが発表されずに清水文雄の手許に残っているという追悼詩「哭蓮田善明」(小

- 川和佑『三島由紀詩』収録、昭48・12、潮出版社)がある。
- 15 初出は雑誌「果樹園」に二回にわたって分載された。第一回は昭和三十四年八月(第四十三号)から同三十五年九月(第五十五号)まで、第二回は同四十年五月(第百十一号)から同四十三年十一月(第百五十三号)まで。単行本は昭和四十五年三月、筑摩書房から刊行。同五十四年八月、津島書房から新版第一刷刊行。
- 16 三島が『対話・日本人論』で「橋川文三が神風連のことを書いている」と言ったのは多分「失われた怒り」を指すのであろう。同評論の初出は昭和三十五年九月号「思想の科学」であるが、後に「歴史と体験」(昭39・6、春秋社——増補版は昭43・9)に再収録された。三島は「道義的革命」の論理」(昭42・3)の中で「歴史と体験」中の一節を引用しており、当然ながら「失われた怒り」にも目を通した筈である。
- (筑波大学大学院 文芸・言語研究科学際カリキュラム 日本文学)